

手負ひ ー しかのうたつた うたより

1

木木の間を すり抜けて 私は 逃げた  
いばらやの やぶを とび 小川の上を とびこさうとした  
そこで 私は 転倒した  
びつしより 濡れて ひづめは 割れた  
水しぶきの うちに 自分の ももの 銀色の矢が  
びかり と 光に 輝いてみた  
はげしい 痛みに 私は たほれた

2

くらい中で 木枯らしの 吹きわたる 音が する  
しづかだつた うづきが はじまる  
毛肌を そろへ 木の葉の中へ しつかりと 自分を うめる  
私は 思ふ ぎらぎら光つた あの時の 矢を  
今 深く 私をいためる つめたい 矢を 空とほく 星が まばたく  
冬の夜は 冷えて来る だんだんと わびしく なつて  
私は 誰に 言ふのだらう  
痛む事や 辛い事を  
木枯しは 吹く 枯葉は 散る かさかさ しづかに 音を たてる  
私は 目をつぶる ちいつと 傷に たへてゐる

3

木もれ日が よわよわと さす 私は うつすらと 日を あける  
木の葉の上には 霜が少し 冷たい風が 吹きわたる  
傷が いたむ はげしく 私は ふたたび 日を とぢる  
自分の 勇ましかつた姿 跳梁と前進の時  
それから 転倒の 夢中の時  
午前の 太陽は 身体に 毒だと 聞いて みる  
咽喉が かわいたので 私は 立上る 泉の方へ 歩き 出す  
私の影が 地に うつる 霜が とけはじめて 湯気が 出る  
その上を 私の 衰れな姿が 動く ゆつくりと みにくく 動く  
冬の日に 傷つく なんて

私は ふと 涙ぐむ